岐阜御殿について

伊奈波神社教学研究員　覧　真理子

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いのあと岐阜町は江戸幕府の直轄領となり、美濃国奉行の大久保長安が管轄します。長安は美濃の幕府領を預かると同時に、法令の伝達・労働力の徴発などで美濃国内の他の領主を指示する立場でもありました。長安は鞆屋町裏に二つの建物を建てました。徳川家康・秀忠が岐阜に来たとき滞在する御殿と、その南に隣接する長安の陣屋です。この敷地は今の岐阜市末広町・新桜町に当たり、伊奈波神社のすぐ北です。

家康は江戸と京都を往来する途中でしばしば岐阜町を訪れており、慶長十六年四月には鵜飼を観覧しました。このときは不漁で「鵜は百二十羽も集まったが、鮎は小さい茶碗のふた一つにも満たなかった」と記録されています。こうした滞在時には、長安が建てた御殿に泊まったことでしょう。

このち元和五年（一六一九）に岐阜町は初代尾張藩主の徳川義直（家康の九男）の所領となります。当初は尾張藩の国奉行（町方と寺社領を除く地域の民政担当者）である藤田民部が岐阜町を預かり、長安の陣屋があった地に新たに御殿を造って藩主の滞在場所としました。元禄八年（一六九五）に町の統治のため専任の岐阜奉行が新設されると、その御殿の地に奉行所が建設され、奉行所向かいにある賀島家が藩主の滞在場所に充てられました。

義直は元和六年を最初として実にたびたび岐阜に来ており、数えると十三回にも及びます。岐阜町での一番の行事は鹿狩で、鵜飼も観覧しました。二代藩主の光友も万治元年（一六五八）に金華山で狩をしています。このころの金華山には鹿がたくさんいたらしく、光友自身が三十八頭、随行した藩士が八十五頭の鹿をしとめたほか、兎・狐も捕獲しました。光友は貞享二年（一六八五）に伊奈波神社の新社殿を造営した人物です。このちも、歴代尾張藩主は幕末の政情多端な時期を除いて一度は岐阜町を訪れました。その滞在場所は、光友の子である三代綱誠（つななり）までは藩主のための御殿、それ以後は賀島家ということになります。

二代秀忠ののちは、将軍が岐阜町を訪れることはありませんでした。一八世紀中頃に編さんされた『岐阜志略』には、「御屋敷御殿、慶安年中より貞享年中まで（一六四八～一六八八）追々御たたみ名古屋へ御引取の由」と記されています。この年代は光友や綱誠が岐阜に来ている時期ですから、この「御殿」が藩主の御殿のはずはなく、家康のための御殿と考えられます。つまり、このころまでは家康のための御殿と、藩主のための御殿が併存していたわけです。

ここに紹介するのは、最近新たに知ることができた「岐阜御殿之図」（徳川林政史研究所所蔵、図1）です。区画に特徴がありますが、承応三年（一六五四）の「濃州厚見郡岐阜図」（名古屋市蓬左文庫所蔵。図2はその一部）と比較すると、「北御殿所」と形がぴたりと一致するのです。「北御殿所」は家康のための、「南御殿所」は藩主のための御殿を指します。つまり図1は家康・秀忠が滞在した御殿の平面図で、これまでほとんど判らなかった家康の御殿のようすを知ることができるのです。

御殿全体は塀に囲まれ、門は南側に開いていました。内部も塀でいくつかの区画に区切られ、着色されているのは建物で、建物内の細線は壁や襖、●は柱を意味します。付箋にある建物の名称は、向かって右（東）から物置・厩（うまや）、下御台所、中央の黄色部分は上から上御料理之間・御老中休所・御膳場・御鑓（やり）之間（警備のための武具を置く場）、その左のグレー部分は上から御風呂屋・御寝之間・御書院・御広間で、門のすぐ前には腰掛（詰所）がありま

した。家康の寝所と湯殿は幾重もの塀に囲まれた一番奥に位置し、御鎗之間の突出部分は車寄で、そこに引かれた弓形の曲線は唐破風（からはふ）を意味し、ここが玄関でしょう。御書院は謁見の間で、床や違い棚も備えていたことが窺えます。岐阜町に来た家康や秀忠の御殿内でのようすが想像できるでしょう。

しかし、これらの建物のうち黄色い部分はこの絵図が作られた時点ですでに解体され、部材は御殿内の下御台所・厩・物置や、名古屋で保管されていました。グレー部分でも門・腰掛は無く、塀も一部は失われています。付箋の文言から、この絵図は御殿の現状調査のために作成されたことや、もとになる原図があったことが推定できます。

実は家康のための御殿内部を描いた絵図はもう一点見つかっています。寛文二年（一六六二）頃の作成と考えられる「濃州岐阜図」（岐阜市歴史博物館所蔵。図3はその一部）で、簡略なものですが内部に「ひろ間」「たい所（台所）」があります。位置関係から、図1の御広間・下御台所を指すと考えてよいでしょう。先述のとおりこの御殿は慶安から貞享にかけて次第に解体されたこと、図3に書院や寝所などが書かれていないことから判断すると、図1「岐阜御殿之図」は図3よりも少し前の作成と考えられるのではないでしょうか。図3の年代以後も御殿の解体が進められたことは、一六八〇年頃に上有知村（美濃市）の川船が「岐阜御殿を名古屋へ運ぶときに御用を勤めた」と述べていることからも確認できます。

こうして、岐阜町にあった二つの御殿のうち家康のためのものは解体され、藩主のためのものは敷地が岐阜奉行所となったため姿を消しました。しかし、幕末の岐阜町絵図には矢来で囲んだ「権現様御殿跡」と「御代々様御殿跡」が記され、尾張藩主も岐阜町に来たときにはその遺跡を見ています。建物はもうないとはいえ、御殿跡地は両方とも一種の聖地として保存され、人々の記憶にも残されていたのです。

近年、名古屋城本丸御殿が復元公開されています。そこを訪れるときには、規模ははるかに小さいものの、同じように玄関や湯殿、書院などを備えた御殿が伊奈波神社のすぐ北にあったことを思い出していただければと思います。

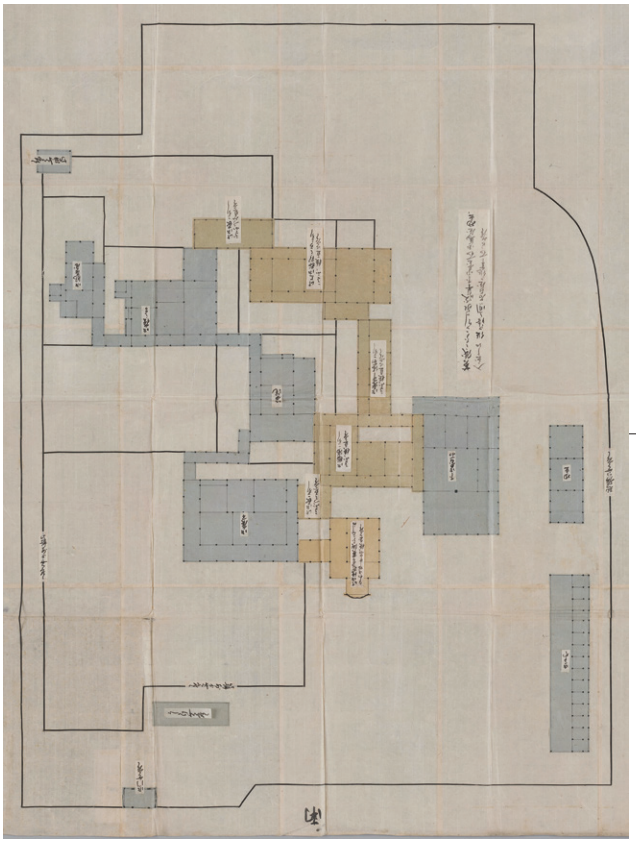

図1

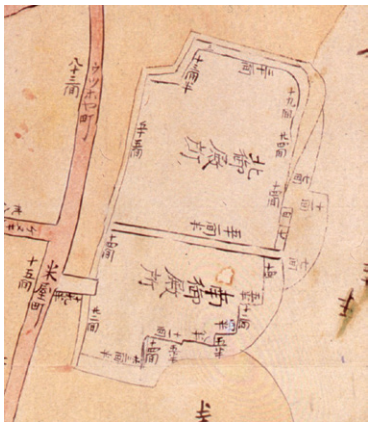

図2

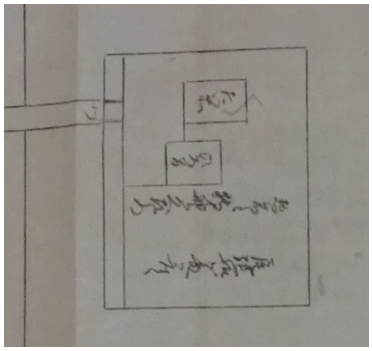

図3